

ただか鹿兒島で一泊して、高松に着いたのは十六日でした。

私の家は農村なので焼けずに残っていて、お陰で家族も無事だった。家へは知らせていないので、帰って来ることは知らなかったから突然のことでは驚いたり喜んだりだ。一緒に帰って来た高松の戦友は「家に寄ってくれ、高松でゆっくりしよう」と言っていたのだが、家が焼けて跡形もない。「こんなになっちゃると顔色が変わってしまった。

高松の町はみな焼野原で、遠くまで見通しがついでしまっている。楽しみに帰って来たのに、気の毒なことであった。今は戦友同志が年に一度は集って、戦地の話をしている。戦死した仲間も随分いたが、私は野戦病院勤務だったので直接の戦闘も少ないし、病氣も早く診てもらやし、輜重だから、馬の手入れなどでは苦労したが、行軍も歩兵より楽だったので生きて帰れ幸せだと思っている。

## 歩兵第六連隊中支に戦う

愛知県 赤木 幸雄

昭和十六年徴集と聞いていますが、何部隊で戦地はどこでしたか。

私は瀬戸市の住民でしたので、昭和十七年三月、名古屋の中部二部隊、歩兵第六連隊の留守部隊に入営したのです。一期の検閲が終わって、七月に中支の第三師団歩兵六連隊へと出発しました。師団司令部は応山という所にあり、そこから五十キロぐらいの前線、浙河にある六連隊本部に勤務することになりました。

連隊に到着した時、本隊は討伐のため、河南省の信陽付近に出動中、連隊長も不在で、本部将校がいて我々初年兵は浙河で訓練のし直し、本隊が戻るまで戦闘訓練をしたが二週間ぐらいでした。

本隊が戻ると、初年兵は各中隊へ配属されたが、六連隊へは三五〇名ぐらいだったと思います。本部勤務

は約八人ぐらいで、私は戦闘室に配置されました。他の人は大・中隊へ分散してしまいました。私は半年後には人事功績係に代わったが、師団司令部へ上申書を作成して応山へ泊まりがけで通っていました。

信陽討伐の戦闘詳報を作成し、参謀へ提出する書類をととのえ説明をします。准尉、下士官に私も同行した。これを作るには、各隊長の報告をまとめ、連隊長も同席して報告を受けるのだが、その時の戦死傷者は二十人ぐらいだったと記憶します。

昭和十八年十一月頃の常德殲滅作戦にも参加したのですが、その時は師団からは第六連隊の二個大隊が主として戦闘し、連隊は他の師団より少数の兵力で作戦したのだと思います。

ところが、十一月二十五日、中畑護一連隊長が戦死をされました。身近で勤務していた私はその状況をお話します。

連隊長は軍から常德攻撃の命令を受けたので、各隊長を集め攻撃準備の指示をしました。更に渡河点設定のため連隊長、副官は乗馬で、騎手、戦闘詳報担当准

尉、功績事務富永軍曹、主計少尉、下士官、庶務係二名、他は伝令五、六名、私も同行しましたがその帰り路、夕方でした。田圃の中で見晴らしのよい所だったが、右手の岡を匍うようにP40戦闘機二機から突然機銃掃射を受けたのです。

馬上の連隊長、副官、馬もやられた。担いで小屋に入ったが連隊長は片足の付け根から穴があき、脚はすっ飛んでしまった。その時すごい音がして再び掃射され、副官の小泉少尉、西浦連隊旗手、功績係富永軍曹、上等兵、当番が戦死、他は重軽傷三人ぐらいだった。後方へ下がったのは一度だけだったのに犠牲となってしまった。その日は、出発してから約十日ぐらいだった。直ぐに第三大隊長が連隊長代理となった。連隊本部は中軸が皆やられたので、それから後は他の歩兵連隊（三十四連隊か）が前線へ出ていった覚えがあります。

中畑連隊長は私にとって忘れることの出来ない良い方でした。年齢は五十歳代ですから私は歳からいうと伴ぐらいだったでしょうから随分可愛がってもらいま

した。

師団司令部の方から貰い物があると「赤木」といつて度々頂いた。八の字のひげをはやしていて、数珠をたえず鞆へ入れて持っていたし、しょっちゅう本を読んでいた孤独な人でした。本部の連隊長室へ行つて、暑い日などシャツを洗つたりした思い出ある人だつた。

その後、新連隊長松山良政大佐が着任（十八年十一月二十九日付）され、旗手も代わつた。浙河の駐地へ戻るまで約一ヵ月ぐらいかつたと思う。戦死者は火葬にしたのだが、本部で七人ぐらい、各中隊もかなり戦死した。常德作戦後はまた浙河へ戻り駐屯していた。

―続いて湘桂作戦についてお話し下さい。

作戦参加のため漢口まで汽車、揚子江を渡つて武昌に上陸してから作戦に入った。中国軍の第一線新墻河を渡河して、長沙の東方を南下したが、茶陵の攻撃では師団は大変手こずつた。我々の第六連隊も激しい戦闘をし、第三大隊が大分やられた。そのため後方には連隊本部からも急遽応援に出動した。この戦闘では

第十中隊長が戦死している。

―茶陵までは、各師団が破竹の進撃をしていたが、

第三師団も第六連隊ばかりでなく他の連隊も七月上旬から激戦をしたということを、静岡の第三十四連隊の人から聴き取り調査をしたことがあります。安仁、来陽と進んだわけですが、衡陽戦の時です。安仁、来陽と進んだわけですが、衡陽戦の時です。安仁、来陽と進んだわけですが、衡陽戦の時です。安仁、来陽と進んだわけですが、衡陽戦の時です。

想い出というか、私の任務戦闘詳報のことですが、常德攻略、茶陵の戦闘では、第三大隊のすぐ直後にいたのです。苦しい戦況もその実態を自分の眼で見ないと戦闘詳報は書けない、他の人の報告だけでは駄目です。人により報告も違うし、作った報告が多いので確認をしないと、事実と大部違うことも多い。

戦闘詳報によつて功績が決まるのです。しかし、私たちには良心があるので、そう粉飾しては書けない。師団司令部へ持つていくと、参謀部なども、その辺の所は良く知っていて、「ちょっと出来過ぎではないか」と注意されることもあった。師団司令部は連隊のことは大体判るし、事実と報告との違いはチェックしてい

る。

―衡陽攻略は大変な激戦で予定より随分かかったわけですが、これの話は他師団の方に譲ってもらい、第三師団の方は、柳州攻略戦に向かつて南下したわけですね。その間に各地で戦闘があったわけですが、柳州攻略と、その後の状況を話して下さい。

柳州攻略の時、第六連隊では、第一、第二大隊が前線で、第三大隊は、飛行場方向へと行動を命ぜられました。本部も戦闘をやったが、南支からは第百四師団（鳳）が北上し、両師団で南北から柳州飛行場を占領したわけです。湘桂作戦発起が六月で、衡陽攻略が八月上旬だと聞いています。柳州飛行場へ第六連隊の第三大隊が突入したのが十一月十日明け方ということで、それから、それまで約半年間、戦闘と行軍の明け暮れだったわけです。柳州攻略後、三師団と十三師団（鏡）は西北へと進んで、貴州省まで重慶軍を撃破追撃したのですが、その後、我々師団は南寧（ベトナム国境に近い）でしばらく駐屯していました。その頃は共産新四軍が時々出て来ました。

廣西省は石筍のような岩山があり、中国の南画のような所ですが、その岩山の洞窟はトーチカであり、食料倉庫であり、住民のかくれ家である。我々はこんな地形に馴れないし、詳しい地図も無いが、相手は神出鬼没だから我が軍も手を焼いた。これは、桂林・柳州戦はもとより、奥地への追撃戦でも苦しんだし、補給も困難なので糧食や医薬、負傷兵の後送にも苦労しました。

―それでは、さらに苦労した湘桂反転作戦と終戦後のことについてお聞かせ下さい。

昭和二十年の四月頃でしたか、軍は占領地を撤収し、速やかに中支へ反転を命ぜられ、我が師団からも、六連隊は南寧を撤収して柳州方面に反転の命令が下りました。その時期は五月上旬ということで、連隊も急いで準備にとりかかったのですが、都安作戦に出撃中を打ち切ったのでしたと後に聞きました。南寧の留守は、第五十八師団（広兵団）の小林支隊が警備をしていたのです。しかし、南寧を通過して仏印へ進んだ師団（原・冬兵団）の追及者が小部隊ごとに未だ西へ西

へと行軍しているわけで、若し南軍を撤収すると、その追及者を見殺しにしてしまふ。

第六連隊はようやく小林支隊に先行して、五月中旬、賓陽に集結し二十八日にはそこを撤収して遷江に反転することとなった。月末には小林支隊と六連隊第二大隊が追尾する重慶軍を撃破敗走させて武江を渡河した。渡河戦には三日ぐらいかかったが、遷江から柳州までの撤退戦は随分犠牲者を出した。とにかく、岩山の中の細い路を一行で進む、敵は待ち伏せして、側射してくる。馬もいるし砲もある。進むことも退くことも出来ない時もあつた。

今度は逆に反撃するため部隊が引き返し、友軍を救出援護をする。昼は敵のP40戦闘機が機銃掃射する。そのため夜行軍で撤退しなければならない。先程申したように、地形・地理不案内、地図も大ざっぱなものしかない。そのため行軍で前を見失つてしまうこともあり、特に三叉路で部隊を見失わないよう苦労したこともあつた。喉は渴くので水を見付けて飲んだら死体が浮いていたりすることもしばしばだつた。湘桂作戦

では全体的に見て兵員の損失は茶陵・遷江戦、偉い人が戦死したのは常德攻略戦でした。

ようやく遷江地区を突破し、独立混成第二十二旅団に収容され、柳州には六月二十一日に入り、北上し終戦を知りました。困りが房だけの歩兵第六連隊の軍旗を涙で奉焼し、人事功績の記録も全部武昌で焼却してしまつた。反転してからの武昌までの徒歩は随分辛く空しいものでした。

しかし、苦しいことが想い出でもある。連隊の内務は、私が戦闘詳報や功績の係だつたためか、余り厳しくはなかつたし、書類は配属輜重の行李専用馬に載せていた。それでも兵站が続いていないので食料は現地調達をしなければならなかつた。連隊本部も中隊と同じように兵隊が食料捜しをしなければならぬ。特に広西省の奥地は食料も乏しく、畑の作物も少ないし、部落民は食料を悉く岩山の中に隠しているのです、その日その日の食物を欠くことも随分あつた。

武装解除後、南京まで貨物列車（無蓋）で、一日いて鎮江で収容された。十一月頃だつたか、油や食料品

の倉庫のような所だった。連隊本部と第一大隊の一部は一緒に、他は分散宿営した。労働は余り無かったが、中国からの給与は少なかったので自活耕作をした。煙草や毛布などは軍の物を持っていたので、それを中国市場で物々交換した。

年を越して、二月末頃いよいよ帰れるということ、列車で上海までいったが、途中で中国軍兵士に持っている物はほとんど取られてしまった。さらに、乗船時、検査などの名目で残りの物も取られた。上海で病氣になった者は他へ入院させ出帆した。船はアメリカのリバティー型で三千トンぐらいだったらしいが、一個連隊は乗り切らず、私は早い方に乗った。博多上陸まで三日ぐらいかかり、三月十日頃上陸した。

頭から粉末のDDTをかけて消毒されたが、復員の時給料を貰ったか、良く覚えていないが、貰っても大した額ではなかった。

復員列車で、十二日の未明名古屋駅に着いたが、未だ夜が明けないので、瀬戸へ帰る者十数人が瀬戸電の始発景雲橋まで歩く。始発まで駅前で飯盒炊さんをや

り、粉味噌を振りかけて朝食をとり、瀬戸駅へ着いたのは六時頃でした。

瀬戸の街は余り焼けず、私の家はそのまま残っていた。帰ることを連絡出来なかったので、突然帰った私を見て家族は驚いて、幻を見ているようにキョトンとしていた。家族には変わり無かったので安心し、その日はとに角眠った。無事帰ったということで翌日皆集まって喜び合いました。

帰国後、マラリア三日熱で、しばらくの間時々発熱し苦しんだ。医者からキニーネを貰ったが、一年ぐらいは、はげしい悪寒と、高熱で苦しんだ。幸い脚氣や栄養失調もほとんど無かったし、鎮江でアミーバー赤痢にかかったが、軍医に診てもらって治療した。とに角、命永らえて、しかも連隊がまとまって帰ることが出来たことは幸福でした。

しかし、共に行動した戦友たちを失い、またその家族たちの悲嘆を思う時、語り尽くせぬ空しさと悲しみを新たにするものであります。